
天使と絵描きの物語

西野 夕日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使と絵描きの物語

【Nコード】

N9376P

【作者名】

西野 夕日

【あらすじ】

帝国は時代の移ろいと革命に倒れ、覇権を争う群雄割拠の時代が過ぎ去り、都市国家サンテはようやく平和の時代を迎えつつあった。そんなサンテ港にある朝、異国からの難破船が漂着する??。

産業革命を経たばかりの港町サンテを舞台にした「家族愛」がテーマの小説です。基本はのんびり路線ですが、若干哲学してますw
文章力、時代設定、更新頻度などなどいたらぬ点多々あるかと思いますが、気になったことは迷わずご指摘いただければ、カイゼ

ンにジンリョクします♪

0 プロローグ（前書き）

シリーズ化目指し、気合い入れて書いてます。・・・気合い入れて
この程度か（汗

0・ブローグ

大型帆船ガイアフロート号は、お世辞にも最新式と呼べるような船ではない。どこぞの貴族が大金を投じて華やかに進水式が行われたのも、今は昔。もうじき第一線を退きどこかの海に沈められる、そんな運命しか待っていない。

船長室で航海日誌をつけながら、トッドはパイプを燻らせる。ロウソクの炎が揺らめいた。

最近では造船技術も進んで、過去には無謀と言われた航路ですら各国の船で賑わうようになってきた。さらには蒸気船などと呼ばれる、風の影響を受けない船——昔気質のトッド船長には信じられないことだ——すら現れ始めている。

かつて一級帆船として栄華を誇ったこの船も、そして世界の海を駆け回った彼も、奴隷運搬船とその船長という低い立場に落ち着いている。

この船と同じように、自分もそろそろ潮時なのかもしれない。そんな思いを巡らせていると、歳のせいかな、うとうとしてくる。

眠っていたのは少しだったのか、それともそれなりの時間だったのか。いずれにせよ激しい縦揺れで、トッドは目を醒ました。

さっきまでとは打って変わって、足下が揺れている。おぼつかないものを感じながらも、なんとか船長室を出る。

よろけながら廊下を走ってきた若い船員が、船長を見つけて叫ぶ。その若者が放った言葉に、トッドは耳を疑った。

「船長！早く救命ボートへ！」

「な、なんだと？何があった？」

若い船員は傍目にも大慌てだった。泡を吹きながらまくしたてる。

「嵐です！急に雲行きが怪しくなっただと思っただら、あっという間に……おそらくもう長くは保ちません！」

バカな。何十年も船乗りをしてきた自負が、彼にはある。船室に入る前に眺めたあの綺麗な星空のどこに、嵐が来るような予兆があったというのだ。だが、そうでなくてはこの揺れ方は説明できない。第一、この船員の報告が事実だとして、大型帆船が沈むような荒れ模様で救命ボートがなんだというのだ。濁流の中に放り込まれた木の葉に等しい。

「港までは？」

「サンテ港が最寄りですが、もうまともに舵を切れない状況です！船長、お早く！」

とりあえず促されるまま歩き出した瞬間、足下から地鳴りのような音が響く。木が割れる音、つまり船体が崩壊する音で間違いない。同時に水が廊下に雪崩込んでくる。そのすさまじい勢いと量は、人の思考を停止させるのに十分な迫力だった。

「せ、船長！」

若い船員の懇願するような視線と声が、彼の最後の記憶となった。

0 プロローグ（後書き）

「1」でもいいんで星つけていただけると、書いてる人はなんか嬉しいですよ（笑）

1 (前書き)

本編開始です。お付き合いくださいな。

港町サンテ。年中天気がいいこの町には自然と人が集まるようで、やはり年中活気に溢れている。

カルデ内海を臨む丘陵状の立地、西にそびえるガリアード山地の石炭資源、ソシエ川の豊富な水源、穏やかな気候……どれをとっても、ここが古くから要所となっているのは必然のように思えた。

画家デイン・ロンドもそんな賑わいと自然豊かなサンテに惹かれて移り住んできた一人だ。以前住んでいた工業都市は悪いところでは無かったが、産業革命の煽りをともに受けた市中には、常に煙が立ちこめていた。石炭を積んだ荷馬車が行き交い、その中を労働者達がカンテラ片手に薄汚れた体を引きずっている、そんな町だった。

そんな町を離れ、引っ越して来てからは画風まで変わった。白い石畳の街並、太陽、海、そして明るいい人々に導かれるように。

そのおかげか、努力の賜物か、徐々に買い手が着くようになり、小さいながら個展を開けるまでになっていた。

とは言え、それだけでは収入が心許ないので、店の看板をデザインしたり、頼まれ事を引き受けて便利屋紛いのこともやっている。実はそっちの方が儲かっているなんて、画家の端くれであるというプライドがあるので、ちょっと人には言えない。

朝、いつもの如く自分のベッドで目が覚める。カーテンの隙間から差し込む光は、相変わらずのいい天気をこれでもかと主張している。

大あくびをしてから、今日は久々に山にでも行ってみようか、と考える。

その途端、玄関のドアを激しく叩く音。

山は中止かもしれない、と直感が言う。

「こりゃひでえな！」

普段は海水浴客が絶えない砂浜を眺めながら、横を歩く丸眼鏡のロイドが悲壮な声を上げる。

その心は二つ。一つは、単純に砂浜の惨状を見て、打ち上げられた難破船の乗組員たちに同情している。一つは、彼が警察官という立場から、これからこなさなければならぬ膨大な仕事量を想像し嘆いている。

そのどっちでもあるのだらうと、友人の心中を察しながら、それでもディンは砂浜から目を離せずにいた。

「貨物船がサンテ沖で沈んだらしい」

早朝、ドアを乱暴に叩いていた犯人であるロイドは、ディンがおはようを言う前にそう切り出した。

サンテに来て知り合った、やや素行の悪いこの友人はサンテ市警の警部補だ。そして彼が、何か困り事を持ってきた時に次ぐ二の句は決まっている。

「ちょっと手伝ってくれ」

ディンは、かつて住んでいた工業都市で食い扶持を稼ぐため、便利屋事務所に住み込みで働いていた。法を犯す仕事以外はだいたい引き受ける、正に便利屋だ。その事実が「画家」よりも先に立ってしまつて、今でも近所の人にいるいと頼まれ事をされる。

ディン自身、人の役に立つのが好きだったし、生活費の足しにはなるし、そんな状況が嫌いではない。こうやって警察から仕事を回してもらったのも初めてではない。

だが、今回は『ちよつと手伝う』レベルの話ではないようだ。辻馬車の中でロイドがほとんど説明しなかったのも、彼自身現場の状況が分からなかったからだだろう。あの時点ではもっと軽い気持ちだったのかもしれない。

「つたく、朝っぱらから迷惑な話だ」

「不謹慎な警察官だなあ」

ロイドはいつもこの調子だ。ぶっきらぼうな外見と雰囲気はよくないと注意したことがあるが、大事なのは仕事の質だと鼻にもかけなかった。実際、彼の市警内での評価は高いらしい。

流れる景色は出勤時間にまだ早く、外を歩く人もあまりいない。滲み始めたガス灯の火とたまに行き交う荷馬車の影が交錯する。

朝もやが残る石の街並は、目覚めていない。

沈んだのはかなり大きな船だったらしく、砂浜には目を覆うばかりの木材、縄、ガラス瓶、そして動かない人間が打ち上げられている。

「で、今回手伝って欲しいのは」

「ここまで来ればさすがに分かるよ。生存者の救出と、片づけの手伝いだね」

ロイドはトレードマークの丸眼鏡を指で上げながら、その通りとうなずく。ろくにセットもしていない癖っ毛が、彼の気分を代弁するようにばたたと風になびいた。

ロイドもデインも、集まった便利屋家業連中も警官隊も口にはしないが、見る限り、生存者など絶望的な状況だ。だからロイドは、なるべくドライに指示を出す。

「できるだけ、生きてるヤツを探してくれ。その方が話が早い。警察的に、ね。じゃ、よろしく」

ロイドは煙草をくわえて溜め息をつく。

「誰か生存者から話が聞ければ——あわよくば船長が酔っぱらっていた、なんて話が出てくれば、ああそれが原因で天候を読み違ったんですね、とか適当な報告書で終わりにできるからな」

死者への畏敬の念と、それを口に出さない強がりが入り交じった表情で、ロイドはマツチを擦った。

確か例の猟奇殺人も、まだ解決を見ていないはずだ。ロイドが過労死しなければいいが、と他人事ながら思う。今度酒でも誘ってやるか。

男達が砂浜に降りて行く。

デインとてあまり気が進む仕事ではないが、文句を言っても仕方がない。覚悟を決め、シャツの袖をまくった。

1 (後書き)

おつきあいありがとうございます。1でも2でも評価ボタンをポチ
ッてくださいw

2 (前書き)

記憶の断片・・・。

始めに、闇。徐々に景色に色がついて、それが以前働いていた貴族の屋敷だと気がつく。

?? 夢だ。今、私はここで働いていない。

必要以上にヒステリックな中年の女中が、うつむいた十歳程度の少女をいびっている。

その少女は、自分だ。見慣れた大屋敷。いつもどおりに掃除の仕方が甘いとなじられているのだ。そしてこの後……記憶通りに平手打ちを喰らう自分。

言われたようにこなしても、結局は難癖をつけてぶたれる。要は、あることないことをふっかけて、ただ少女をいびりたいだけだ。

その時は気がつかなかったが、夢で見た女中の顔にはサディステイックな笑みが浮かんでいた。

さらに浮かぶのは、色の無い、ついこの間の情景。

奉公先の主が、いつもの屋敷の大広間にいつもの顔で立っている。その横には、うつむいた少女。やはり、自分だ。

商品として、売られる時の記憶。

「悪魔の子め。生きていられるだけありがたいと思え」

さつきよりもさらに粗末な服に変わっている彼女は、例えるなら抜け殻だった。主の裏切りによって心を碎かれた十歳の女の子の目は、もはや何の感情をも宿さず、ただ景色を映すだけのガラス玉。こんなことばかり思い出して、私はどうしたっていうんだろう。

……ちゃんと、死ねたのかな？

次に、強い光。有無を言わせぬ暴力的な光によって、意識が現実に戻ってくる。誰か太陽に遠慮というものを教えてあげて欲しい。「生きてる……？」

目の前に広がるのは青い空、波の音。背中で感じる砂の感触。仰向けで寝ているようだ。

首を上げると、自分の体が見える。驚いた事に、右足についた枷がそのままだ。やせ細った自由の無い体で荒れ狂う海に投げ出されたのに、どうやってここまでたどり着いたのだろう。

ベトベトとおでこに張り付いた自らの髪の毛が不快だ、と思う。しかし、この腹立たしい気持ちの原因は、そんなことじゃない。

はつきり、生きていると分かった。

それがたまらなく悔しい。あの時、暗い船倉に押し寄せた濁流のような海水を見て、やっとピリオドだと思ったのに。

左腕が激しく痛みを訴えてくるが、それが何を意味するのか、理解できない。骨が折れているのかもしれないと頭では想像できる。が、死にたかったはずの自分が『生きている証』と言っても過言でない『痛み』を感じているとは、どういう皮肉だ。

「なんでだろ……」

動かない左手を無視して、右手を太陽に空かしてみる。目立った傷も無い。軽く意識を集中すると、空気の流れが集まって行く感覚。この忌々しい力までそのまま、か。

ぱらぱらと風に流れる乾いた砂のように、自分も一緒に連れて行って欲しいとさえ願う。

「おい、君……生きてるのか？」

砂を踏みしめる足音と声が聞こえ、やがて視界に男の顔が映る。栗色の髪の毛と目を持つ、見た事の無い男だ。直感的に、優しくそんな人だなと思う。

そう、まだ生きてるね……。

心の中だけで何の感慨も無く呟くと、ふいに瞼が重くなる。

「おい！誰か来てくれ！生存者だ！」

生存者、か。いつそのまま死なないかな。そんなことを考えながら、少女は目を閉じた。

「すっかりしろよ、絶対死なせないからな！」

思いがけず頬をつたった一筋の涙に、自分でも驚いた。これはなんのための涙なのだろう。

そんな感慨をを最後に、彼女の意識は再び闇に落ちて行く。

2（後書き）

おつきあいありがとうございました。良かったら評価して行って下さいな

レースのカーテンが持ち上がったてはフワリと落ち、また持ち上げられては下がる。風と遊んでいるようだ、と言えば聞こえは良いが、当のカーテンは、もしかすると迷惑なだけかもしれない。

見ている人がどう解釈するかで、物事なんてのはどうとでも受け取れるものだ。

そんなどうでもいい想像を繰り返す毎日。私は弄ばれるカーテンか、それともじゃれることをやめない風か。

??。

病院から教会に回されてくる患者がいる、と連絡を受け、神父はサント病院の事務担当者と面会していた。

通常、入院費を払えないような患者や、体の傷だけで投薬治療の必要性が薄い者が、病院の空きベッド数によって移送されてくる。そう頻繁にあることではないが、珍しいことでもない。そもそも神父が若い頃は、病院などという施設はなくて、ほとんど教会で診ていたものだ。

移送されてくる患者は、あの沈没船に乗っていた女の子らしい。

医師の診断の結果、身体的外傷は奇跡的と言っていいほどに軽く、多少無理をすれば今すぐにでも日常に戻れる程度らしい。しかし、教会に預けてくるということは何かしら問題がある、ということとイコールだ。

報告書には次のように記してあった。

『例えて言うなれば彼女は「空っぽ」である。彼女自身の能動的発

言はもちろんのこと、こちらから何を話しかけてもほとんど答えず、必要最低限の会話でさえ積極的には行わない。加えて、まれに彼女が発する言葉ですら、聞き取るのに苦労するような小さな囁きであり、意思疎通は極めて困難である。

怪我の程度は、左腕の骨折（ごく軽度）、右足首に枷によるものと思われる擦過傷（やや深い）が見られる。適切な処置を施し養生すれば、現時点で命に関わるような怪我ではない。

彼女の場合、身体的な怪我よりも心に負っている傷の方が重大と思われる。原因は不明だが、沈没による恐怖からの心的傷害、もしくはそれ以前から病を抱えていた可能性も考えられる。」

3 (後書き)

おつきあいありがとうございました！

4 (前書き)

連投です。

デインが教会に着いたのは、お昼を過ぎた頃だった。彼が海岸で発見した身寄りの無い少女は、怪我が癒えるまでここにお世話になっている。

「あんな子でも、奴隷なのか」

ロイドの現実感に乏しい感想が頭の中に甦る。

サンテでも確かに奴隷制はあったがそれは過去の話で、デインが産まれるもわずつと前に廃止されている。今では完全に非常識な制度という認識だが、そうではない国も存在するのが現実だ。その証拠が、今回沈んだ奴隷運搬船であり、溺死した乗組員の大半を占める奴隷達だった。

「おや、デイン。今日も来てくれたかの」

なんとなく淀んだ思考に陥っていたデインに声をかけてきたのは、白髪のおじいさん。まとった雰囲気まで温和なこの人が、サンテ教会のワトソン神父だ。

「すみません、毎日押し掛けてしまつて」

「いや、誰か話し相手がいた方が、彼女にとつてもいいはずだのう。シスター達はすっかり相手にされていないようだからのう……」

溜め息をつく神父は、本当に困っているようにしか見えない。

この様子だと、彼女の心境が変わったというような事も無いようだ。

「昨日から、シスター・メイをノエルの担当にしたよ」

「メイ？あの元気娘ですか」

いつも全力でドタバタと走り回っている若いシスターの姿を思い

浮かべると、自然と笑みがこぼれてくるようだ。

「あの有り余るパワーが、ノエルにいい影響を与えてくれるといいんだがのう」

「きつと大丈夫です。僕にも少しずつ、話してくれるようにはなってきたからです……多分」

苦笑い。

ここに来てから三日経った。あっという間と言えばあっという間、長かったと言えはだいが長い三日。つまり私は、それで何か感じるほどの感情を持ち合わせていない。でも多分、あの人は今日も来る。

4 (後書き)

ご精読ありがとうございました

ドアを開けると、少女は相変わらずベッドに座って窓の外を眺めていた。窓の外、白い石畳の街並は活気に溢れているが、それを見つめる無感情な瞳は、予想通り変化無しだ。

長い金髪、透き通るような白い肌、サファイアのような赤い瞳。奴隷どころか良家のお嬢様と言っても過言では無い容姿だ。

しかしその儚げな雰囲気から連想するイメージは正に『薄幸』。このまま消えてしまうのではないか、なんて柄にも無く頭をよぎる。「ノエル、調子はどうだい？あ、シスターに結ってもらったのかな？似合ってるね」

努めて明るく声をかけても、奇麗に結った金髪を褒めても、冷めた瞳がちらりとデインを捉えただけで、彼女の反応は至って小さいものだ。

「普通」

ほとんど感情のこもっていない声に、思わず苦笑い。

「素っ気ないなあ。ほら、お土産。サンテ名産のオレンジだよ。今、剥いてあげるからね」

来る途中で立ち寄った青果店。たいした買い物をした訳でもなかったのに、いつものおばさんがひとつ余計におまけしてくれた。なんでも、今日が二十回目の結婚記念日らしい。

ころころと太って愛嬌のあるおばさんが、尋ねなくても嬉しそうに自慢するものだから、デインの方が気恥ずかしくなってしまった。後ろで苦笑していた店主のおじさんも同じだったのだろう。

もつすぐ三十にも手が届きそうだと言うのに、結婚する宛すらない。それでもああいう穏やかな家庭生活を素直に羨ましく思う。

比して、目の前の少女は深刻だった。怪我ではなく、心が。二十近く年齢差がある少女の視線に、圧倒されてしまう。

「はい。おいしいよ？」

お皿に並んだ宝石のような果実を差し出す。ノエルはそれを、フオークで刺して小さな口に運ぶ。しかしその行動は、きわめて事務的で『食べ物を出されたから口に入れた』という、言うならば『動』を感じられない動きだ。

ほとんどの乗員が亡くなった大惨事にあつて、彼女は奇跡的なほどの軽傷で済んでいた。左腕の骨にはひびが入っていたが、命に別状は無く、医者をして、運がいいとしか思えないと言わしめたほどに。

「おいしい？」

「……」

笑顔を向けても、彼女は返事をしない。再びカーテンの外に目を戻すその仕草は、もうデインの存在を忘れたかのように冷たい。

何を口に入れても、おいしいともそうでもないとも感じない。実は私はもう死んでいるのではないだろうか。目の前でニコニコと笑うこの優男も、どこかで生きていたいと考えていた自分が造り出した、優しい幻想ではないだろうか。

「どうして、ここにいるの？」

やっぱり心は開いてくれないか、と落ち込んだ矢先、ノエルが小さな声で言葉を紡いだ。彼女が初めて発した能動的な言葉に面食らうが、それこそが突破口であるかのように、デインは慌てて口を開く。可能性にすぎるように。

「僕は画家だからね。普通の人より自由に時間を使えるんだよ」

「違う」

間髪入れず、それも少し苛立ったように、ノエルが視線を向けてくる。その綺麗な目に満ちているのは、手負いの獣が持つような攻撃的な警戒心に他ならない。

「どうして私に構うの」

彼女の語尾は疑問形であつても下がる。ほとんど呟いているようなものだが、この三日間でだいぶ聞き取れるようにはなっていた。なるほど、こうして毎日見舞いにくる自分のことをいぶかしんでいるのか、とデインは考える。

「そうだね。ノエルが変に思うのも無理は無いかな」

言葉を選ばなければ、彼女との対話がぶつとりと途切れるような不安が、常につきまとう。

「でも、純粹にノエルが心配なんだ。サンテの町に知り合いがいる訳でもないみたいだし。放っておけないよ」

少し考えて、結局本音を喋る事にする。取り繕つて格好いい事を言うのは、得意じゃない。

「それに、僕がノエルを見つけたんだしね。これも何かの縁かもしれないし、お見舞いに来るくらいしてもいいだろ？ せっかく助かったノエルの心配をするくらい、許してよ」

おどけて笑いかけてやるが、彼女の目はすでに元の死んだ魚の目に戻っている。

「私は……死んだ方が良かったのに」

「え……」

なんとか会話を繋ごうと考えていたのに、デインの思考はそこで停止した。いや、停止させるのに十分な一言を、ノエルは吐いた。

「生きていることに意味なんて無い。どうせまた売られるだけ。なら、死にたかったのに。それに私は、悪魔の子だから」

やはりその言葉には何の感情も宿ってはいない。じぶんの運命を悲観するでも、デインに偽善者と罵る響きも無く、ただそれだけの意味を持つ裏表の無い言葉。

——彼女は、死にたがっているのか。

星の出ていない、真っ黒な夜空に吸い込まれたかのような心持ちになって、デインはめまいを覚えた。こんな小さな命の口から、これほど衝撃的な言葉が出てくるとは、彼には予想し得なかったのだ。浅はかさを嘆く。感情を殺した彼女の闇は深く、想像以上にリアルティのあるものだった。ノエルの抱えた傷を知らずに、ノエルの心を開こうなどと、甘かった。それどころか中途半端な優しさが、彼女をもっと傷つける可能性すらあるのかもしれない。

思わずその小さな体を抱きしめるくらいしか、デインにはできない。

「ごめんね」

自分でもよく分らないうちに、謝ってしまっている。それで彼女の気が済む訳も無いが、何か声をかけないとデインが泣いてしまいそうで、彼女が溶けて消えてしまいそうだった。

5 (後書き)

おつきあいありがとうございました。

ノエルは思う。

どうしてこの人は自分に優しくしてくれるのだろうか、と。

彼女に課せられた今までの立場は、奉公人として貴族の世話をすることであり、最近では、更に下の奴隷という立場であった。それは正に使い捨てであり、「生かしておく」以上の思いやりとか優しさは全く入ってこない世界だった。

なのにどうしてこの人は泣いているのだろう。いや、涙は流していないが、泣いているように感じるのはなぜだろう。なぜ、謝っているのだろう。こんな風に抱きしめてもらったのは、一体いつが最後だっただろう。

全部投げ出している自分と、人が温かいものだったと知っている自分は、どっちが本当なのだろう。まだ、分からない。

ノエルの右手がデインの体に触れようとして、すっと降りた。

翌日から、ノエルの表情が少しだけ柔らかくなったように、デインには感じられた。

???。

「ただ者じゃないと思ってましたが、すごい人ですねえ！」

と、明るい声で笑うのはシスター・メイだ。

ノエルの表情がほんの少しだけ明るくなった事を言っているのだろうと、デインにも想像がつく。

「僕は何もしてないよ。彼女の意志が大事なんだから」

「またまたあ、謙・遜・しちゃって！憎いですねえ、このこの」

「あのね、メイ……」

ニヤニヤしながらデインを肘で突つくこの娘、れっきとしたサンテ教会のシスターである。

金髪碧眼、容姿端麗、柔らかな笑顔が絶えない明るい性格。黙って微笑んでいれば正に修道服の天使なのだが、残念ながら『彼女が黙っている時』に遭遇する確率は『サンテに雪が降る』それと等しい。イコールゼロだ。

「私もいろいろと話しかけては見たんですけど、どうも反応がイマイチなんですよねえ」

「多分、相づちを打つ暇もなかったんじゃないかな」

本心だが、皮肉に聞こえたかもと心配する。が、メイは案の定気にも留めていない。

「でもノエルちゃん、来た時より明るくなったような気がするのホントなんですよねえ。デインさんは一体、どんなお話をしてたんですか？」

表情はおどけているが、彼女の目は真剣だ。

……誤解してはいけないのは、メイは決して不真面目なシスターではないと言う事。むしろその逆で、いつでも全力、いつでも大真面目なのが、彼女の本性である。

「どんなって……別に変わった事は話してないな。だいたい、僕がそんな話し上手かい？」

「ですねえ」

「そこはお世辞でも、そんなことはありませんって言おうよ……」

デインが溜め息をつく、バツが悪そうに笑う。

「すみません、冗談ですよ。デインさんって、なんだかおもしろい人なんですもん。ちよつとからかい甲斐があるって言うか、ですねえ」

「よく言われるよ……」

年下になめられ、年上にこき使われるのは今に始まった事じゃない。

すると突然メイは、なるほど！と大きな声を出し、右手の拳を縦に降り、左掌に打ち付ける。絵に描いたような「なるほど！」だと妙に納得するディン。

「だからノエルちゃんも心を開いてくれてるんですねえ！」

「いや、全然開いてくれてないけどね」

「そっか！私に足りないのは、おもしろさだったんですねえ！」

いつもながら突拍子な思いつきだ。だが、彼女を例えるなら、限らない直線。

「ええ？それは違うと思うけど……ちょ、メイ、どこ行くの？」

しかもその直線の頭には傘が着いている。言い出したら止まらない矢印。

「私に『おもしろさ』を追加するんです！」

どこにそんな根拠があるのか、自信に満ちた含み笑いを見せ、風のようにいなくなるシスター・メイ。

どんな方法で追加するのか興味深いところだが、ディンも暇ではない。頼まれていたレストランの看板を今日中に仕上げないと、納期に間に合わなくなってしまう。

6 (後書き)

おつきあいありがとうございました。

7・胎動

町の中心、サンテ中央広場。古くから、市民の憩いの場として、革命に倒れた王の処刑場として、新しい統治者のお披露目の場として、様々な役割を担ってきたであろう町のシンボルだ。

その正面に急ピッチで建造中の建物が、その姿を徐々に現し始めている。

世界で二例目となる蒸気機関車の路線開通に合わせ、駅舎を造っているのだ。落成式はこの広場に多くの市民を集め、大々的に行うという。

レンガを持ち上げた屈強な男が、近くの作業員と何事か大声で会話をし、笑いあっている。

小さい子どもを連れた女性が何人か、子どもそっちのけで井戸端会議を開いている。

自転車に乗った通りすがりの郵便局員が、知り合いの老人と挨拶を交わしている。

どれも世間一般で言うところの『ありふれた日常』であり、見方を変えれば『幸せな風景』と見て取ることもできる。

しかし、男は思う。

どうして彼らはあれほど能天気でいられるのだろうか。こんなにも欺瞞に満ちた世の中に対して、なぜ疑問を抱かない振りを続けていられるのだろうか。

男は願う。

愚かなこの世の真なる統治を。

人外の降臨を。

そのための儀式を、贄を。

真なる平和を。

——夜。

男は狂った眼光で生け贄を選び、血塗れた手で、屠った女の一部分を持ち帰る。

彼が信じる聖夜の完成のために。

7・胎動（後書き）

ご精読ありがとうございました。

デインが今日持ってきたパイは、とてもおいしかった。自分の味覚なんてとつくになくなったものだと思っていたから、おいしいと感じたことには正直驚いた。

デインは心底嬉しそうに笑う。

「これは僕がサンテで一番のお菓子職人だと思ってる人のパイなんだ。やっぱりあの人はすごいな」

うなずくデインに勧められるがまま、ノエルはアップルパイを三つ、ぺろりと平らげてしまった。

初めて自分の意志で食べ物を食べたノエルに、デインの心境は満足なんてものではない。

「すごく、おいしかった」

全然おいしくなさそうな、相変わらずの呟き口調ではあるが、これはおおいなる進歩だ。

「そんなに気に入ったんなら、また買ってくるよ。って、口元にソースがついてるぞ」

「ん……」

ノエルが子どもじみた仕草で口元を拭おうとする。結局とれなくて、苦笑いのデインがハンカチで拭いてやると、

「ありがとう」

一瞬面食らった。まったくの無表情ではあるが、感謝という感情が、そこには確かに存在していた。

「へ？……あ、ああ、どういたしまして」

そんな普通の子どものようなノエルが、とても嬉しい。今なら少し突っ込んだ話をして許される気がして、デインは切り出した。

「怪我ももうだいぶ良くなったよね？」

こくりとうなずくノエル。最初の頃はこんな意思疎通すらまともにできなかった。

「で、退院したら、何か決めてることはあるの？どこか行くことか」

返事はなく、ただ冷めた目がディンを見返すだけだ。無いことはディンだって分かっているが、一応聞いておくのが礼儀だろうと思っただ。

「良かったら、うちに来ない？」

「え……」

よほど意外だったのか、ノエルのぼかんとした表情をディンは初めて見る事となった。

「僕はこの歳になって結婚もしてなくてね。絵ばっかり書いてたから、かな。だから、ノエルが来てくれたらきつと楽しいだろうなって」

ノエルは怪訝な顔でディンを見ている。やがてぼそつと呟く。

「……まさかの、ロリコン」

「な、なんだって？」

今度はディンが口を開けて固まる番だった。

その内、笑いがこみ上げてきて我慢できなくなる。もしかしたらノエルは、元々はとても面白い子なのかもしれない、と思う。

「確かに、君が後十年早く産まれてたら、きっと魅力的な女性になってただろうけどね」

微かに眉をよせ、むっとしたようなノエルを見て、ディンはようやくそれ以上の笑いを噛み殺すことに成功する。

「ごめんごめん。ノエルがそんなこと言うなんて思いもしなかったから」

カーテンが風に揺れた。

「そうじゃなくて、さ。お互い一人なんだし、それなら二人で暮らした方が楽しいでしょ？」

まだ笑いをこらえているディンの言葉に、なんだそれは、とノエルは思う。理由になっていない。でも理屈抜きに、実はそうなんじゃないかとも思う。きっとディンの言葉に嘘は無いのだろう。

8 (後書き)

ご精読ありがとうございました

神父の日課は、一日の終わりに患者の様子を見て回ることだ。

ようやく包帯が取れたノエルの左腕を診た後で、ワトソン神父はいつもの柔らかな笑顔を見せた。

「もう大丈夫。さすがに若いと回復力が違うわい。羨ましい限りだのう」

「神父様も十分お若くていらっしゃいますよ」

横で手伝っていたメイが笑う。性格はともかく容姿が一級の若い女性に言われれば、神父とて老いても男である。嬉しくないはずが無い。

「まあ、ワシもまだまだ若いもんには負けておれんからのう。はっはっは」

「確かに、時間が空くとフラリと釣りに行ったまま帰ってこないあのバイタリティは、若い人にも無いですねえ」

調子に乗って浮かべた神父の笑顔が凍り付く。

「ぐ……抵抗できない哀れな老いぼれを言葉責めでいたぶるとは、メイも面白い趣味を持つとるのう……」

にっと笑うメイの笑顔に悪気は無い。悪意には満ちているが。

ノエルは思う。よく愛想を尽かさずに面倒を看てくれるものだ、と。

ディンに対しても感じる疑問だが、これほど無反応な自分を、ここまで根気よくなんとかしようと考えるだろうか。自分なら絶対やらない。

だが、どれだけ良くしてもらっても、自分にはその恩を感じるだけの感情が無くなってしまっている。知識として「感謝」とは何か知っているが、その先へは行けない。

正に抜け殻という表現がぴったりだ。

師弟漫才を繰り広げても、ノエルの顔には笑顔一つ浮かばない。儂げな青い瞳が、窓の外の暗い夜空を映す。

デインが彼女の表情を少し変えたあの日から、再び彼女の歩みは止まってしまった。メイが、神父が、デインがいくら努力しても、次の一步を踏み出してこない。

「ところで、ノエル」

一瞬、メイの悲しそうな目を見てしまった。一つ息をついてノエルに呼びかける神父。

大切な話をしなければならぬ。だが彼女はいつも通り返事をせず、いつも通り感情の無い視線を向けるだけだ。

「今後、どうするか？」

はっとしたように目を開いたのは、メイだ。

「知つての通り、ここはサンテ教会。身寄りの無い病人を一時的に看病し、社会に返すのも私たちの仕事の一つだの」

そう、あくまで一時的に。

身寄りの無い病人、病院に入院するだけの金がない者が、未だこの町には溢れている。それ以外にも町の外から流れて来る者も多々いる。産業革命の余波が、生活が豊かになるとともに病気を抱える人が増えたとは、一体どういう皮肉か。

病人を治し、別れを告げるのも、神父の役目だ。

ノエルは馬鹿ではない。神父の言いたい事はよく理解できた。病院や教会は、身体的に元気な者を置き留める場ではない。

だからと言って何かを感じる訳ではないが、つまりはここに居られる期間が終わったということだ。

だが、ノエルに目指す場所などある訳が無い。そこで神父とシスター数人で話し合った結果が、これだ。

「とは言え、私もノエルの境遇を痛いほどに知っておるしの。だから、どこにも行く宛が無いのであれば、この教会で働かんかの？」

「ノエルちゃんなら大歓迎だよ！」

教会と言えど、来る者全てを受け入れるような余裕はない。しかしノエルの場合は事情が事情だし、それに彼女はまだ幼い。

「それと、デインの話は聞いたるのう？知つての通り、お前さんが来た当初から引き取ると言ってくれているのう。私も彼を良く知っているが、穏やかで思いやりのある青年じゃ。今もお前さんのことを一番に考えてくれているしのう。彼ならば十分に父親代わりを務められるだろうと思う」

そして、最後の選択肢。

「そして、自由に、したいように生きるという選択。もちろん、ノエルが思うままに生きる点ではどれも変わらんかの」

無事に生きていける確率は低いが、もしもノエルがそれを臨むのならば、神父として止めるつもりは無い。

一方のメイは、そんなことになったら力づくでも止めるつもりなのだが。

ノエルは繰り返し感じる疑問を、飽きることなく反芻する。

なぜここまで良くしてくれるのだろうか、と。

デインにしても、眼前の彼らにしても、ノエルは厄介者でしかないはずなのだ。奴隷身分は汚く卑しい者。いくら奴隷制度が無い国と言えど、突然外国から流れ着いた汚い子どもにここまでしてくれるのはどういう見だ。何か裏があるのではないか。しかし、自分に利用価値があるとも思えない。では、地下組織か何かを通じてもう一度売り飛ばすつもりだろうか。

そう言えば、人の面の皮の下は信用できない、とはかつての主人

の口癖だった。彼はその言葉の意味を、ノエルを売るという行為をもって実証してくれた訳だが。

「ノエルちゃん、教会でもディンさんでも、好きな方でいいんだよ？」

メイの必死な表情は理解できる。

「メイ、これはノエル自身が決めることだ。私たちは彼女の意志を尊重しなければならないよ」

ワトソンだつてノエルを放っておけない気持ちはある。だが、ノエルが自分で決めてくれなければ意味が無いのだ。

「……はい」

珍しくしゅんとした表情を見せるシスター。まるで日が沈んだような印象を受ける。

「でもでもほら、まだ焦つて今すぐ決めなくてもいいよ。まだしばらくはここにいてくれていいから。ね？」

「ゆっくり吟味して考えることよ。何と言っても、ノエルの人生なんだからの。……さて、お話は終わりだよ。今日はもう休みなさい」

「おやすみ、ノエルちゃん」

先に出て行つた神父に続き、メイも泣き笑いのような表情を見せて部屋を出て行く。

死にたい私の今後、か……。

分からない。

ランプを吹き消した。

9（後書き）

ご精読ありがとうございました。

ロイド・イリュアインは、サンテ市警の警部補である。彼のトレードマークは丸眼鏡とくわえ煙草、そしてくたびれたトレンチコート。仕事にかかせないこの三点セットには、彼なりのこだわりがある。

「まったく、なんだってんだ？コイツ、完全に狂ってやがるぞ！」

机の上に並べた死体検分書を前に、ロイドは毒づいた。相手は未だ姿の見えぬ猟奇殺人鬼。

「若い女性ばかり五人つてのも、随分だな」

後ろの机で同僚も溜め息をつく。

この一ヶ月で連続五件。被害者は工場労働者四名と少女が一名。いずれも若い女性ばかりだ。

始めは労働者——つまり資本主義に対する共産主義者の抵抗かと検討をつけたサンテ市警だったが、四人目の被害者が有名な不良少女だったことでその線は薄くなった。

要は、深夜の町を一人で歩いている若い女性なら誰でも良かったのだろう。そして夜勤の都合上どうしても深夜の町を歩かなくてはならないのが、たまたま工場労働者だったということだ。

この事件の異常性を際立たせているのは、その猟奇性だ。現場に残された五人の遺体は、手であれ足であれ、必ずどこかのパーツが欠如していた。おまけにその切り取られた部品が、周辺に捨てられている訳でもない。犯人は必ず死体の一部を切り取って持ち帰る。それが今、サンテの町を恐怖に陥れている異常な猟奇殺人犯の恐る

べき行動。

一体どんなセンスをしているのか、ロイドにしてみれば知りたくもないが、知らないままにはしておけないのがこの仕事だ。

夜中の犯行で、必ず被害者が一人になった後に襲われているため、目撃者もいないし、犯人につながる証拠も出ない。

イライラしてマツチを擦る。煙草をくわえて気分が上向けば、どんなに良いことか。だが、吸い終わる前に、イライラの種が頼みもしないのに耳に入る。

「まったく、困ったもんだ。早いとこ賞金稼ぎの連中でもなんでも、なんとかしてくれんかね」

立派なデスクをあてがわれた課長がパイプを吹かしながら、呑気な仕草で薄くなった頭をかく。それをロイドは苦々しい思いで聞いている。

革命前の警察と革命後の警察では、まるっきり意味合いが違う。

革命前の警察は、外敵からの治安維持を担う組織であり、言わば『軍』としての性格が強かった。それでも軍から独立していたのは、都市国家内部に対して、反乱など起こさせないよう睨みを利かせるためでもあり、市民にとっては『軍より身近な治安維持機構』という体裁があったからだ。

そして革命後の警察は、完全に内部向けの機関となった。革命によつて「平和」の意味が変わったのと同時に、警察も変わらなければならなかったのだ。

それまでは『外敵がもたらすの死の危険』こそが平和と対をなす脅威であった。それが今や、隣人とのトラブルや事故、落とし物や盗みといった身近な脅威と成り代わっている。そしてそれを解決するのが警察の役割であり、引いては司法の役割となってきたのだ。

ロイド以降の若手警察官はそういう意識が強く、対する脂の乗っ

た上層部は「内政不干渉」という過去の警察像から未だ抜けられない。それは市民の側も同じなのかもしれないし、時代は繰り返しているだけなのかもしれないと思いつつも、年寄りが若者にとっていつまでも「目の上のこぶ」である理由でもあった。

だからロイドは、「以前の警察」である課長が、賞金稼ぎや私立探偵、便利屋などの「以前の手段」に過剰に頼り過ぎるのをよしとしない。法によらない彼らは、今の警察の存在意義を根本から崩しかねないのだから。

とは言え、未だ歴史が浅く脆弱な警察機構において、下手をする組織より情報収集力に長けた彼らの力を全く借りない訳にもいかなかった。

ロイドとて、大切なのは平和であってメンツではないと感じ、言い訳できるだけの歳はとったつもりだ。

「ほどほどにしとけよ、ロイド。あんまり健康に良くないらしいぞ、それ」

同僚——マークス・レッドが苦笑いのような表情でロイドのくわえ煙草を差す。

「煙草が？ そうなの？」

「ああ。最近喫煙者が急に増えただろ？」

確かにマークスの言う通り、十年前と比べて町で見かける煙の量がだいぶ増えた。産業化が進むにつれ収入が増え、嗜好品たる煙草を買う余裕のある人が多くなったからだろう。

「で、それから少し遅れて、原因不明の病気で死ぬ人が増えたんだって」

オカルトめいた話だ。ロイドは溜め息をついた。

「はあ？ なんだそれ？ おいおい、神様のバチとか言うんじゃねえだろうな」

が、マークスはいたって真面目な顔で続ける。どうでもいいが、

彼の真面目な顔はなんとなくネズミを思わせる。

「バカ言え。医者が言ってるんだ。ほら、実家の裏が医者だって話したろ」

そう言えばそんな話を前にした気がする。

「この前立ち話してさ。増えてるんだって、患者が。なんだか肺の病氣らしい」

「その病氣の原因が煙草なのか？」

肝心なところで、彼はかぶりを振る。

「さあ。まだ因果関係は分かんないってよ。ただ、喫煙率と平行して増えてるらしいから、医者達の間でも研究が始まってるんだと」
「ただの噂ならまだしも、医者 of 言うことなら少し気になる。」

「だからよ、お前も結婚控えてるんだし、少しは健康に気を使えよ」
「余計なお世話だっつーの。それにまだ結婚までいってないぞ」
「今度はマーカスが呆れた表情を作る番だ。」

「おまえ、まだ決めてないのか？ だって婚約はしたんだろう？」

彼の言う通りだ。

「ほっとけ。俺にもいろいろ考えがあんだよ」

忙しい仕事の合間を縫って、ようやく婚約までこぎつけた。紆余曲折、順調な恋と胸を張れたものでもないが、それでもここまでやつと来た。

それはそうなのだが。そこで結婚まで踏み込もうとすると、もう一人の頑固親父のような自分が待ったをかける。

「こつも忙しい仕事。休みなんかもとに取れないし、家に帰らない日さえある。一緒になって果たして彼女は幸せなんだろうか、という疑問が離れないのも事実なのだ。」

ロイドの脳裏に、口数は少ないがいつもにこやかなアンナの顔が浮かぶ。おそらく、彼女は何も言わずに着いてきてくれるだろう。だからこそ、アンナのために最善の選択をしたい。

「まあ、先行き不安なのは分かるけどな。こんな組織だし、休みは

くれそうにも無いし、煙草よりも先に仕事辞めた方が体にはいいよな」

「冗談とも本気とも取れない同僚刑事の口調。」

「俺は残念だよ。同僚が結婚さえためらうようなこんな世の中が、革命の結果だなんてな。いつそもつと暮らしやすい世界があるんじゃないか、なんて思っちゃうぜ」

「そりゃいいな。とりあえず事件の無い平和な世界だな」

「マーカスは呆れたように苦笑した。」

「どこまで行っても刑事だな、お前は」

「その通り。だからさっさとこんな事件終わらせちまおう」

「マーカスの話を信じたつもりはないが、ロイドはまだ長い煙草を灰皿に押し付けた。」

「と、若い刑事が慌てて飛び込んでくるなり叫ぶ。」

「例の事件、また新しい被害者です！」

「若い女か？」

「そうです！」

「色めき立つ署内。ロイドは溜め息をついてトレンチコートを羽

織った。」

10（後書き）

ちょっと現実くさい話ですがw・・・ご精読ありがとうございました。

日が暮れる前の中途半端な時間だからか、喫茶オーシャンの店内は空いていた。

「あらデインさん、こんにちは」

ドアを開けるなり、若い娘が優しい笑顔で出迎えてくれる。

実質レストランの『喫茶』オーシャンを切り盛りするウェイトレス、シャローヌ・アンデルセン。本人曰く、

「二十も後半なのに看板娘だなんて、恥ずかしいです」

しかし、気だてのいい上品な性格と、全てを包み込むような慈愛に満ちた彼女は、来店する男性客には女神にしか見えず、自然、彼女目当てに足しげく通う客は多い。

デインとてそういう気持ちが無い訳ではないが、三日に一回は訪れるその訳は、純粹に『シャロも含めた店の雰囲気』と『頑固者のこだわり料理』が好きだから。

そんな看板娘と、その父親フェイロー・アンデルセンが作る創作料理が受けて、喫茶オーシャンはサンテの人気店の一つになっている。

「やあ、今日も元気そうだね、シャロ」

「おかげさまで。いかがですか、絵の方は？」

彼女が聞くのは、デインが注文を受けて取りかかっている絵のことだろう。依頼主はこの店の主人フェイロー。つまりデインは今、オーシャンに掛ける予定の絵を描いている。

「自分で言うのも何だけど、結構調子がいいんだ。やっぱりお世話

「なってる人に頼まれると、気合いが入るみたい」

事実、絵の制作はかなりうまく言っている。お気に入りの景色をイメージしながらだと、筆も早い。いろいろ頼まれ事はあるが、やはり描きたいものを描いている時が一番楽しく、時間が過ぎるのも忘れてしまう。

とは言いながらも、何か一つ、一歩だけ足りない。今回は常になんな想いがつきまとっていた。

絵の出来に関してはおそらく問題ないが、デインの気持ちの中で整理のついていない事柄があるために、そのわずかな影響が絵に表れてしまっている。ネガティブな感情が良いアクセントになる場合もあるが、今回は逆効果だ。楽しく描いて、楽しい気持ちで見てもらいたい絵に滲んだ感情はいらない。

そんな時はここに来る。コーヒーを飲み、窓から見える海を眺め、自分を見つめ直す。とは言え、今回の「滲み」の原因はデイン自身にもよく分かっていた。

デインの額面状の返事を聞くと、それでもシャロは上品な笑顔を咲かせ、ややスローな独特の調子でしゃべる。

「あらあら、本当ですか？それは楽しみです。……あ、ごめんなさい、私ったらお客様と立ち話だなんて」

生まれ持った雰囲気もあるのだろうが、細かい動作にも気品が溢れている。着飾れば貴族の出と言っても誰も疑わないだろう。

席についてからメニュー表を手取るが、注文は大体決まっている。それを知っているから、シャロもすぐ脇で待ってくれている。

「シャロ、一つ僕にアドバイスをしてくれない？」

いつもと違う展開にも、シャロは柔らかな表情を崩さない。

「あらあら、私がお答えできることですか？」

「軽い気持ちで答えてくれていいよ。絵とは関係ないし」

本当は関係大アリなのだが。

「すごく辛いことがあって心を閉ざしてしまった友人に、僕がして

あげられることってなんだと思う？」

簡潔にまとめるとこういうことだろう。

瞬間、いつもにこやかな彼女の表情が目に見えて曇った。何かまずいことを聞いてしまったのだろつかと、慌てて自分の言葉を振り返るデイン。

「あ……ごめん、何か失礼なこと言ったかな？謝るよ」

原因が分からないから、ちょっとばつが悪い。今度は彼女がはつとした顔。

「あらあら、私ったら、すみません。デインさんが悪い訳じゃないんです」

と、シャロは苦笑いで手をひらひらさせた。感情を押し込めたその笑顔。シャロも過去に何かあったのかな、と想像を巡らせてみるが、到底結論が出る話でもない。

「質問にお答えしますね。それはきっと、その人のそばにいてあげることだと思いますよ」

「そばにいる、ね……」

なるべく一緒の時間を作ってきたつもりではあるのだが。

デインの合点のいかない表情を見て、シャロー又はくすりと笑った。

「でも、それは口で言うほど簡単ではないですよ、デインさん」
明るい口調に変わりはないが、濃い群青の瞳にふと遠い影がよぎった……ような気がした。青い海に雲の影が落ちるような、そんなイメージがデインの脳裏に浮かぶ。

「そばに『居る』ということは、ただ隣にいる、ということとは違うんです」

「ん……深いね」

彼女の声は心地よく耳に馴染む。

「私はそのお友達のことを知りませんが、きっとその人は分かち合っ
て欲しいんだと思います」

「分かち合う？自分の痛みを？」

半分正解です、と言いながらウインクするシャロ。今度はまるで学校の先生のような雰囲気だ。

「心の痛みはもちろん、苦しみも喜びも。今感じている全てのことを、分かち合ってくれる人。傷ついた人は、その感情を自分だけでは抱えきれないから、心を閉ざして自分を潰さないように守っている、と私は思うんです」

シャロの声はいつの間にか真剣味を帯びていく。

「抱えきれない荷物は、隣にいる人が持つてあげればいいんですよ。頑張れ！貴方なら持てます！……って、隣で励ますことも大事ですけど、最初から持てない荷物を頑張らせて持たせるのは、逆効果だと思いませんか？」

デインは相づちを打つのも忘れて聞き入っている。面白い本に出会って、早く先が読みたいと思う、あの若い感情の芽生えを感じていた。

「だから、持ちきれない感情と一緒に抱えてあげる。その人こそ、潰れそうな方を救う一番の救世主なんです」

につこりと笑うシャロ。眉根をよせるデイン。どちらが年上だか分からない。

「デインさんは、その人の喜んでる顔がみたい。そうでしょう？」

それが一番だ。頷いて見せる。

「それは、作れるものじゃないですよ。ご友人の中から、自然と湧いてきます。だって、デインさんはこんなにも、その人のことを想ってあげてるじゃないですか？」

ぱっと出された手鏡の中に、いつになく難しい顔をした自分が映っている。

「あ……」

一瞬の後、それは呆けたものに変わった。シャロが楽しそうに笑顔を作る。

「すみません、お客様にお説教みたいな真似をして」

照れ隠しに笑いながら、後ろ頭をかくディン。

「いや、すごく参考になったよ、ありがとう」

「いいえ、少しでもお手伝いになったなら幸いです」

「うん、いい絵が描けそうな気がする」

本当にそんな気がする自分の単純さを、ディンは嫌いではない。

大事なことに気が付いたつもりでも、人間はすぐ忘れていく。

シャロの言いたいことの本質は、ディンだって経験してきているはずなのだ。それをずっと新鮮に抱えているシャロがうらやましいと、素直に思った。

「でも、羨ましい」

彼女の言葉に、考えていたことを見透かされたのかと思って驚くが、どうやら違うらしい。目を細めてディンを見るシャロの目は、羨望の眼差しを地で行っていた。

「ん？何が？」

「そのお友達です。真剣に自分の事を考えてくれてる人が、身近にいるんですもの」

シャロが思っているほど相手には伝わってないだろうな、と思う。苦笑いが浮かぶ。

「ああ、僕は割と真剣なだけだね。なかなか伝わらなくて」

「そうなんです。本人は差し伸べられた手ですら、見る余裕がないんですよ。失ってから気が付く、ってよく言いますけど、本当にそうですよね……」

遠くの物を見る……と言うよりかは、もう二度と戻らない過去を思い描いているという表現が当てはまりそうな、憂いを帯びた目。時たま、彼女の目はこういう色を見せるが、今日はかなりはつきり表れているように感じる。

「シャロ？」

「あ、そうでした。ご注文は何になさいますか？」

にこやかに笑うシャロは、看板娘の顔でペンを取る。

11（後書き）

ご精読ありがとうございました。

分らない。答えが出てるようにも、永遠に解けない謎かけのようにも思える。

夜。ノエルは、ベッドの中で冴えてくる自らの意識を、どうにもできずにいた。

まるで自分の意志など始めから無いかのように、この身体は眠ろうとしない。まさか身体すらも、自らに愛想を尽かしたか。それも仕方ないように、彼女には思えた。

デインは今日もアップルパイを持って訪れ、いつもどおりの優しい笑顔で彼女の心を理解しようとした。シスターは努めていつもどおりに振る舞い、ここが彼女の居場所であるように錯覚させてくれた。

だが、彼女には何が正しいのか分らない。

ついこの間、貴族の家を離れた時。彼女が信じてきた幾年はある朝あつけなく崩れ去り、家族との再会を信じていた道は、望みもしない地への途方も無い道程へと姿を変えた。

あの二重の裏切りの中で彼女は、初めて『死』を意識した。いや、本当に彼女が望んだのは、『死』などという現実的なことではなかったのかもしれない。自分という存在自体を——存在した記録すらも、この世から残らず消してしまいたいと思うほどの、絶望。

だが、今は——。

絶望が消え失せた訳はないが、それとは正反対の方向に光を見出したい自分が、確かにここに存るのではないのか。

そして自分が自分に言っている。そんな光は偽物だと。かつて光を信じ、不条理に耐えながらも地道に彼女の精神を支え続けたひたむきな自分が、今度は静かに彼女を脅迫している。

お前は悪魔の子だ。

いくら考えても答えは出ず、心は堂々巡りを繰り返す。そもそもここまで自分の心を揺らすあの優しい人たちが、彼女には分からない。

最終的に彼女は、自分の声に従う。

しばらくしてベッドから這い出したノエルは、燭台に灯をして鏡の前に立つ。メイが外出用にと用意してくれた服に、初めて袖を通す。

メイがニコニコと服を持ってきた時は、きつと着ることは無いと考えていた。それがいざ、こうやって鏡の前に立って着替えてみると、我ながらなかなか似合っているなとさえ思う。服が黒系の色だと、明るい金髪とのコントラストが際立つ。今まで服に気を使ったことなど一度も無かったが、シスターのセンスの良さのおかげで少し気分がいい。

「痩せっぽっちだもんね……」

自嘲気味に呟いて、髪に櫛を入れる。本当に自分は何をやっているのだらうと、思わず笑いそうになった。笑えるのに笑わないのか、笑えないのに笑おうとしているのか、自分でも理解できない。

身だしなみを整え、ドアをそつと開ける。

後片付けのシスター達を除けば、教会内をうろつく者はいない時間だ。さほど苦勞せず、裏口から町へ出られた。通りは行き交う人もほとんど無く、どこかひんやりした空気が溜まっている。

「どこに……行こうかな」

その言葉に前向きな意味合いは一切なく、むしろ後ろめたい気持ちだがどんどん膨らんでくる。

振り返って教会の尖塔を見上げ、少女が呟く。小さな謝罪の言葉は、産まれて間もなく風にさらわれて、消えた。

12（後書き）

ご精読ありがとうございました。

シスター・メイは大事なことを忘れていた。

もともとそっかしい面があるのは自分でも分かっている。が、分かったところで二十年以上にもわたる自らの積み重ねが治るものではないと思う。むしろ治す方法があつたら教えて欲しいくらいなのだが。

そんな訳で、今宵もノエルに訊き忘れた件で、シスターは廊下を歩く。端から見れば早足で、本人的には普通の足取りで。

ノエルの部屋のドアをノックするが、毎度のごとく返事はない。もう寝ているのかも、とふと考え、そつとドアを開けた。

「失礼しまーす。ノエルちゃん、まだ起きてる？ちよつと訊きたいんだけど……」

部屋は真つ暗だった。暗闇に目を凝らすと、ベッドの掛け布団がわずかに盛り上がっている。

「あれ？」

やはり寝ているのかとも思ったが、なんとなく違和感を感じる。うまく言えないが、人の気配がしない。

そつとベッドに近づくと、その予感確信へと近づく。思い切つて布団をはぐと、その中には丸めたシャツが入っているだけで、ノエルの姿はどこにもない。

「ノ、ノエルちゃん！」

慌てて明かりをつけても、狭い部屋にノエルの姿はなく、メイは一瞬途方に暮れた。トイレに行ったのかも、と安直に自分を安心させようとするが、それなら布団に細工をして行く必要はどこにもありはしない。

「どうして……！」

ノエルによそ行きのために用意していた服が見当たらないことに気が付いて、シスターは悟る。

ノエルは出て行った。あの子は教会に居ることもデインと暮らすことも避けて、第三の選択を選んだ。

その事実だけで、シスターの胸は押しつぶされそうに痛み、思わず自分の体を強く抱きしめた。

結局私は、あの子の心を開いてやるどころか、何もしてやれなかったんだ。あの子が来てから、私は一体何をしてたんだろう……。うつむいて視線を落とした弾みで、机の上のメモ帳が目に入る。そこにはただ一言だけ、四つの文字だけが寂しそうに取り残されていた。

ごめんね、と。

「……ッ！」

メイの頭を雷が駆け抜けて行く。それが合図だったかのように、彼女の中に自分が戻ってくる。

違う。ノエルは心から私やデインさんが嫌だから出て行ったんじゃない。あの子はまだ本当の自分を見せるべきかどうか、迷っている。そうじゃなきゃ、こんな書き置き……！

おやすみの挨拶の時は確かにいたのだから、ノエルが出て行ってからまだそれほど経っていないはずだ。大切なことを訊き忘れていた自分に感謝しつつ、頭を巡らせる。そうじゃなければ、気が付くのはきつと明日だった。

そうだ、過去に落ち込んでいる場合じゃない。

それに、私の言葉は確実に彼女に届いていた。

「ほんつともう……謝るんなら出て行くなつての！絶対見つけてあげるからね！」

景気付けに呟いて、メイは駆け出す。その顔には不敵な笑みさえ浮かんでいる。

13 (後書き)

ご精読ありがとうございました。

少女が家出を決意した頃、時を同じくして警察も夜間警らを始めるところだった。

例の連続殺人犯を確保するための警戒警らだ。とは言え、通常勤務を考えると署の人間を総動員する訳にもいかず、若手警察官中心でシフトを組んで人を見繕っていた。

六人殺されても、まだ上の連中は本気にならないし、重すぎる腰を上げない。きつとまた戦争でも起こらないと気がつかないのだから、ロイドは冷めた気持ちでそれを見ている。

その六人目が殺されてから三日。これまでのペースから考えるとそろそろ動き出してもいい頃合いだった。

「警戒は二人一組、決して離れるな。死体を切り取っている以上、ヤツはかなりの馬鹿力で、しかも鋭利な刃物を持っている可能性が非常に高い。何かあったら笛で合図。……まあつまり、いつも通りだ」

猟奇殺人鬼の警戒にしてはやや緊張感の抜けた声色で指示が出る。居並ぶ刑事達も慣れたものだ。

「ウチのかみさんが、なんでこんな時間に仕事なんだ、浮気だろうってうるさくてよ。浮気できたらそっちにいつてるっつーの」

そんな会話を指揮官がめざとく聞きつける。

「ゴーシュ、奥さんの愚痴もいいがな、言ってくれるうちが華だ。私はもう粗大ゴミ扱いだぞ」

ベテラン刑事のカミングアウトに刑事達から笑いが起きる。

談笑は余裕とか油断といった類いのものではなく、なんとなく漂う夜の町の嫌な気配を、バカ話で少しでも薄めようとしているかのようだった。

「さて、そろそろ時間だ。各員、くれぐれも油断するんじゃないぞ。では、解散」

所定の持ち場に署員達が散って行く。今日こそは捕まえたいと思
いながら。

ロイドが拳に力を入れて眼鏡をかけ直すと、横から元気な挨拶が
飛んできた。

「改めてよろしく願います、ロイドさん」

今日のロイドの相棒は新人刑事ディックだ。この間の配置転換で
刑事になったばかり、元気が取り柄の若者である。責任逃れの上ば
かり見ているロイドにとって、情熱を持って仕事に当たる彼に好感
が持てるのは必然に思えた。

「ああ、よろしく。今日で終わりにしたいもんだな」

警察的にも、個人的にも、体力的にも。

「そうつすね！絶対捕まえてやりますよ！」

「そりゃ頼もしい」

彼のラグビー選手のような体と元気があれば、犯人と格闘になっ
ても大丈夫だろう。

「お前みたいな若いのが、これからの警察を引っ張って行くんだろ
うな」

ロイドの言葉に、ディックは少し驚いたように返す。

「何言ってるんすか。ロイドさんだって若いじゃないですか。俺なん
かより頭良いし」

「……まあな。まだ腐る気はないけどよ。じゃ、よろしく頼むぜ」

ガス灯の明かりがかるうじて町の輪郭を映し出す。そんな深夜の道を、ノエルは独り歩いてた。

ここはどこだろう。私はどこに行くんだろう。

道のりはおるか、町の地図でさえ見たこともない彼女にとって、夜のサンテは正に迷路だった。

とりあえずこの町を出よう。明日の朝には抜け出したことが分かって、きつと見つかってしまうから。そうなったら、メイもディンも多分怒らないけれど、だからまた私は傷ついてしまう。あんなに優しさが辛いものならば、いつそ何も無い方がいいに決まってる。そう決めて歩いているのだが、こんなに広い町だとは思ひもしなかった。

「方向音痴……」

彼女は昔からよく道には迷う。同じ景色でも見る方向で分らなくなったり、昼と夜で全然違う景色に見えたり……その程度なら可愛いものだが、ノエルの場合はなかなか筋金入りだ。かつてのただっ広い貴族の屋敷や、この間など教会の中で自分の部屋を探して迷った。

「バカすぎる……」

仕方が無い。大きな道に戻って、ただひたすら真っ直ぐ歩けばその内町が出るだろう。

そう思っただきな道を探すほど、小さな路地に迷い込んで行くのは、ある意味才能かもしれない。

ディンは夜間の慌ただしい訪問にも、いつもの優しい笑顔で迎えてくれた。メイはいつもにこにこ穏やかな彼を、正直ただの優男

かと思っていたのだが。しかし。

ノエルがいなくなった。

その事実は初めこそデインの心にも少なからずショックを与え、動揺させたようだった。だがそれもごくわずかの間で、彼の目はすぐに光を取り戻す。身支度を整え、走って家を出る。

「僕が迂闊だった。無理にでも引き取るべきだったんだ。彼女の意見を尊重しようなんて、そんなことノエルは望んでなかったんだよ」

メイはデインを見直した。

メイにしてみれば、僅かの間とは言え面倒を見ていたノエルに「裏切られた」という想いさえ抱いてしまったのだ。ところがデインは、そんなことを微塵も考えていない。それどころか今だってノエルを信じ続けている。

「ノエルの心に鍵をかけたのは、僕ら大人だ。僕らがその鍵を開こうなんて、大人の傲慢でしかなかったんだ。事情は分からないが、ノエルは、奴隷としての生活以外に、何かにひどく裏切られた節がある」

メイには分からなかった。確かに周囲の人を信用していないようではあったが、それがデインの言う「事情」に起因するのか。

「だからノエルは、僕らのことを、心が許せる大人なのかどうか見定めてたんだ。もしかするともう少しだったのかもしれないよ？でも……」

「それは同感です。でも、私たちは、大人の事情を彼女に押し付けて、それを彼女自身が選んだことにしようとした、ってことですな」

怪我が治った人を教会においておけない、という事情は正論だ。

だが、今まで散々理不尽を押し付けられてきたであろう彼女にとってみれば、それはただの「建前」で、「大人の事情」に過ぎない。強い正論が、全ての人の心まで納得させるものではないことくらい知っている。まして彼女は、まだ十歳そこらの子どもなのだから。

彼女がメイ達のことを信用できそうだと踏んでいたのなら、最後の最後で結局「大人の事情」を振りかざしたことへの、彼女の失

望は想像するに難くない。信用したい、でも信用できない、そんな気持ちの現れこそが、あのメモ帳の一言だったのか。

そこまで考えて、メイの胸がちくりと痛む。

「でもね、メイ」

表情に出したつもりは無いが、ディンはメイの気落ちを見抜いたらしい。また優しく笑ってみせる。

「全部、僕らの推測だ。だから絶対にノエルを見つけて、彼女から話してもらおうよ」

そう、前を向かなければ。ノエルをこれ以上失望させるなんて、大人代表としてちよつと恥ずかしい。

「ええ、そうですね！」

生け贄は彼女にしよう。

最近は警察も動き出し、供物の調達もだいぶやりづらくなった。とは言え、それでもターゲットには事欠かない。

殺人鬼がうついついていると知ってもなお、夜勤のために町に出る労働者達を見ていると、同情を通り越して嫌悪さえ抱く。自らの命をかけてでも働かなければならないのか、それとも自分だけは大丈夫だと本気で思っているのか。私はこうやって、夜道に目を光らせているのに。

金が無いと生活すらままならない。やはりこんなくだらない世は一度やり直さないといけない、と殺人鬼は思う。圧倒的な魔の力を呼び出し、住み良い世界を創る。

そのための供物として、彼女のような穢れの無い血を持つ少女は最高の贄だった。

暗闇の中でもはつきりと分かるほどの、見事な金色の髪と、憂いを帯びた儂げな瞳。どこの良家の娘だか知らないが、申し分の無い逸材だ。あの首を供えればきっと、儀式の完成までの日数が飛躍的に短縮できる。

だが、もう少し。もう少し裏路地に踏み込んで欲しい。そうすれば確実に仕留めることができる。

彼は異常者だが、馬鹿ではない。自らが正常でないことはよく分かっている。大義のためとは言え、人殺しは人殺し。許されるものではないとさえ考えている。理想の世界が完成した後に、それでもその罪を問われるのであれば、喜んで罰を受ける覚悟もある。それゆえ、残酷で非情な罪を重ねることに躊躇いは無かった。

だからこそだ。目的を果たすために、今避けなければならないのは警察に捕まること。身柄を拘束されては何もおじやんになつてしまう。

そつと、殺人鬼は彼女の後を追いつ始める……。

せめてノエルに、退院したら行きたい所でも聞いておけば良かった。と後悔したところで、完全に後の祭りだ。

デインに彼女の行く場所など分かるはずもなく。ノエルを探す手段にしても思いつくのは、手当り次第に町を走り回るくらいのことだ。我ながら情けなくなってくる。

そして方法はないのだが、問題は幾つもある。

ノエルのこともそうだが、もっとも恐ろしいのは、今この町に潜伏している猟奇殺人鬼のことだ。

狙われるのは若い娘ばかり。つまり、今デインの後ろを走っている元氣娘も、殺人鬼から見れば、殺される資格があるということだ。「メイ、僕から離れないでよ！」

「わお！デインさんかくくいー！惚れちゃいますよ？でも、私に惚れちゃダメですよ」

「君ってヤツは……」

さっきまで見たことも無いようなしおらしい顔をしていたくせに、もうすっかりいつもの調子を取り戻したようだ。

なんとなくジャケットの上から触れて、そいつの存在を確かめずしりと重いそいつは、万が一に備えて手入れだけは怠らないでいた三十八口径。だけど、最後に射撃練習をしたのはいつだったろうか。大体、剣はともかく、銃の類いは元々苦手だ。

「間違つてメイを撃たないようにだけ気をつけよう……」

「え？なんですか？」

「なんでもない」

自分で考えていて悲しくなるが、きつと無いよりいいだろうと、無理に思い直す。

「どこに行っちゃったんですかねえ……神父様達が見つけて下さってるといいんですけど」

「ワトスン神父、大丈夫なの？こんな夜中に」

なぜか自信満々の笑みで答えるメイ。

「大丈夫です。お隣さんも叩き起こしてきましたから。すごい包丁持っていました」

教会の隣は肉屋と魚屋だ。確かに、すごい武器を持ってそうだが、それはそれで殺人鬼に間違えられたりしないだろうかと不安がよぎる。

「それに、狙われるのは若い娘ばかりですよねえ。あっちは年配の男ばっかですから、問題ないと思いますよ」

相も変わらずあっけらかんとして遠慮のない物言い。君も対象なんだぞと言いたくなるが、それでこそメイと言うべきか。

だが、この広いサンテの町で少女一人を見つけることは、正直至難の業だ。そこでデインは考えを絞る。

あれほど人の世を嫌っていたノエルが、人が溢れるこの町に留まりたいと思うだろうか。それにあの子は賢い。朝になれば、彼女の脱走が発覚して誰かが探しにくる、とちゃんと理解している。だからこそその夜中の脱走のはずだ。そこまで分かっていたら、おそらく夜のうちにサンテを出てしまつたろうと踏み、町の外れに向けて探していた。

それは自分の勘に賭けるような、ある意味では無謀なものだったが、限られた人数で一人を捜すにはある程度範囲を限定せざるを得なかった。

「一応、警察にも届けましたけど」

「あっちはあっちで犯人探しに躍起だから、あんまり期待はできないかな……」

「ロイドさんに頼んでみては、どうでしょう」

メイの提案は、デインとロイドの仲を考えれば至極当然のことだが、

「ロイドは今夜も警戒で出てるんだ。無理は言えない。それにもし警戒してる警察官が見つけてくれたら、それはそれで結果オーライさ」

密かにディンはそれにも期待している。出勤している人数は多くないらしいが、それでもディン達よりも人探しに長けた人達がディン達よりも多人数で目を光らせているという事実は、いい気休めになった。

できれば自分で見つけてやりたい、というのが本音ではあるが。

行けども行けども広い道に出ないとは、どういうことなんだろう、とノエルは首をひねる。首をひねって歩いても、ゆっくり歩いても進んでいる気がしない。

立ち止まる。と、後ろからずつとついてきている足音が、そのまま近づいてきた。ここなら十分だと判断したらしい。

考えてみれば、異常な精神状態だ。殺人者がうろつく夜の町で追いかけられながら、平然と歩き続けているのだから。それどころか少し待ちくたびれた感さえある。

振り返ると、ノエルの三倍はあろうかという大柄な男が仁王立ちしていた。それを間近で見ても何も感じない自分は、やはり壊れているのかなと今更思う。

どうやら自分の短い人生は、

「お嬢さん、こんな時間にどちらまで？」

ここでこの異常殺人鬼に、

「夜遊びはいけないな」

バラバラにされて終わるらしい。

「でも、君は運がいい。神でさえうらやむような、永遠の命を、私が届けよう」

その上、相手も狂っている。

ようやく、望んでいた死が訪れるのかと思うと、少しほっとする自分がいた。

そう言えば、こんなこと前にもあったなと他人事のように思い出す。売られる直前、変態趣味の使用人が、その歪んだ欲望を剥き出しに襲いかかってきた時だ。

無意識に風の流れを読んでいる自分に気が付き、瞬きを繰り返す。

「君は……少し変わっているな」

目の前に立ち止まった男が、低い声で問う。

お互いにね、と心の中で返事をしながら、彼の目を見上げる。存外普通の顔で、その辺に紛れていても怪しまれることは無いだろう。「殺すの」

そう尋ねると男は、笑みとも驚きとも取れる小さな表情を唇の端に浮かべる。

「ほう。怖くないのかい？」

「さあ。でも、私は死にたいから」

男は黙ってノエルを見おろしていた。ノエルも黙ってその視線を見返す。

「なるほど、感情をなくしたのかのようだ」

その通り。被害者を選び好んでいるだけあって、人を見る目はあつららしい。

「だが、それでは生け贄としては不十分なのだ。こちらの都合で申し訳ないが。死への恐怖が強いほど、悪魔への捧げ物として力を発揮する」

悪魔。いよいよもって頭がおかしい男だ。

ノエルがそんなことを考えていると知ってか知らずか、彼は溜め息をついてみせた。少しわざとらしい、そんな溜め息。

「じゃあ殺さないの」

再びわざとらしい溜め息が少し癢に触る。

「それにしても惜しい逸材だ。贄としての素質を、君は十分すぎるほど持っている。だから……」

男が動いた瞬間、ノエルは何がなんだか分からないまま宙を舞っていた。背中の衝撃で、壁にぶつかってその後落ちたことを知る。込み上げる咳と下腹部の痛みで、腹を殴られたのだと知る。

「まず、君の勘違いを解こう」

髪をつかんで無理やり顔を上げさせ、ノエルの目を覗く。その男の顔には表情と呼べるものがなく、まるで作られた人形のようにだった。

そのまま右手をひねり上げられたノエルの口から悲鳴が漏れる。

「私が、本当の死を教えてあげよう」

人を殺して喜ぶ猟奇殺人者という異常性を、ノエルの本能が理解し始めていた。

久々に巡り会えた獲物に、男は興奮を禁じ得ない。精神の高揚を外に出さないようにすることは、もはや難しくなってきた。

目の前の少女はかくも可憐で、儂く、そして何より複雑な精神の持ち主だった。こんな高貴な生け贄に巡り会えるなど、きっと運命が自分の背中を押しているのだ、とさえ思ってしまう。

彼女は、何かの原因で心を閉ざし自分を殺すことで、肉体的な死を望んでいる。いや、男に言わせればそう思い込んでいるだけだ。肉体的な死は簡単だが、それでは良い生け贄にはならない。精神的に追いつめて殺さなければ、せつかくの貴重品も意味がないに等しい。

「随分と我慢強い性格のようだから、君は勘違いをしてしまったんだろう」

言葉の意味を分からなくても仕方ないが、彼女はおそらく分かってしまう。肉体的なダメージを抑えながら、痛みを強く与えるように打撃を与えたのは、彼女の精神を追いつめるためだ。その甲斐あってか、賢い少女は男を完全な異常者と認めたようだった。ただでは死なせないと理解したということだ。

細い指を強く握ると、骨がきしんで少女が痛みにも目を見開く。男の動作は機械的で、無駄な動きが一切ない。

「生物の根幹は、死への恐怖だ。簡単に言えば、人だろうが馬だろうが虫だろうが、死ぬことを恐れ、最も避けるように、本能は命令する。いかに人間と言えど逃れられることではないのだ」

先ほどまでは無様に転がりながらも男を見上げ、それがどうしたという年に似合わぬ視線を向けてきたが、今はもうそんな余裕もないはずだ。それが証拠に、彼女の瞳は激しく揺れ、動揺を表し始め

ている。

右腕を踏みつけながら、男は無機質に続ける。

「理性で押さえつけることはできても、そのたがが外れてしまえば、野生だった頃の真実を思い出し、素直になるものだ。痛いものは痛い、怖いものは怖い……そして、本能通り死を恐れる」

右腕がぎしつと音を立て、少女はたまらず悲鳴を上げる。そのまま力を入れれば折れるだろうが、そのギリギリの苦痛が彼女をより奈落へと落とし、恐怖を倍増させる。

「そう、それでいい。素直になりなさい。君は死にたいようだが、本当はそうではないのだ」

違う。そう言いたいのか、少女の目が思い詰めたように細かく震える。

鳩尾に固いつま先がめりこんだ。

男はかがみ込み、ノエルの瞳を覗き込んで、我慢できずに優しく笑う。

「ようやく本当の君が戻ってきたね。そう、もっと怖がって。そうすれば君は永遠の命にもっともっと近づけることができる。確かに、死ぬこと自体は苦痛だ。そして苦痛のない死は死ではない」

こんなに楽しいことはない。今正に、この少女は本物の恐怖を覚醒させようとしている。

男の言葉が熱を帯びるほど、ノエルは着いて行けなくなる。いいように弄ばれて、体はもうほとんど言うことを聞かない。そして自由を奪われた体に、男の声はより強く響く。

「そして、恐怖。さっきも言ったが、本能的な恐怖だ。さらには知識的な恐怖、とでも言おうか」

勿体ぶるような男の声を聞きながら、ノエルの心に黒いシミのようなもの広がって行く。

「動物は本能で死を感じるが、人にはそれが分かる。死を知識として捉え、その未知なるものに恐怖することができる」

知識的な、恐怖。男はノエルから少し離れ、止めを刺すように囁く。

「何度も言うが君は強い精神力の持ち主だ。だから、内なる感情を全て自らの中に押し込むこともできたし、それで克服したと思っていた。生きること」

男の声は鷹ぶりを抑えたような静かな声に変わっていた。ノエルは壁に体を預けて座り込み、抵抗することもできなくなっている。男の言葉を聞きたくないという自分の悲鳴と、言葉通りだと感じる自分が、同時に存在している。

「だが、それは間違いだ。感情を持たない人間などいないのだからそれを閉じ込めることはできても、消すことはできない。できてしまったら、それこそが死だ。分かるか」

分かっている。そんなこと、言われなくなつて分かっている。生きている限りつらいことは振りかかってくると誰もが言うし、もう十分知っている。けれど私にはもう家族もいなければ、人間として扱われる資格すら無くなつてしまった。

有り体に言えば、傷つきたくないから何も感じない世界に自らを閉じ込めた。けれど、そんな軽いものじゃないと自分では思っていた。こんな不幸は他の人には無いと思っていた。

「だが、どんなに辛くとも、他人にとっては所詮人事だ。同じようにしか見えんのだよ。それに気が付いたろう？」

純粹で強い悪意が、年端も行かない少女に突き刺さる。

「感情を殺し、自分を守る。つまりそれは『生きたい』ということに他ならないのではないか？」

その通りだった。死にたければ自分を守る必要なんてない。自分を守るということは、それは死への恐怖そのものだ。

私は、最初から何も棄ててはいなかった。だったら、ディンたちの優しさを避け続けた私は、一体なんなのだろう。今更気付くなん

て、殺される前に殺人鬼に気付かされるなんて、なんて滑稽なんだろう。

悔しくて、どうしようもなく怖くて、思いもよらず涙がこぼれた。それを見た男の声に明らかな歓喜の響きが加わる。

「考えてみる。君は一体、この世に産まれて何を残した？ 一体どれだけの人間が、君を覚えていると？」

畳み掛けるようにしゃべりながら、男が再びノエルに近づく。

「思い出してみろ。君を記憶として留める人間の数を。一体どれほどの人間が、本当に悲しむと？」

手が、首にかかる。涙が止まらない。もはやノエルの仮面は剥がれ落ちていた。

「そして、考えてみる。死に際でどうしたいのかを。いや、当ててみせようか」

掌に力を込めながら、男が初めて嘲笑った。

「君は、『生きたい』」

「——ッ！」

瞬間、ノエルの感情が爆発した。開かないように蓋をしてしっかりと押さえつけていた想いが、今壁を破り、頭の中をめちゃくちゃに駆け巡って行く。

だが、男の手の力はどんどん強くなる。先ほどの相手をなぶるような手加減は、もう必要ないのだ。なぜならノエルは、男の言う生け贄としての条件を満たしたから。

「君はそれを知りながら、死んで逝け」

何も残っていない。誰も覚えていない。

ノエルという存在が、ほとんど記憶にない母の面影が、辛い奉公先で優しくしてくれた友達が、奴隷商の蔑む目が、船が壊れる音が、太陽の光が、神父の穏やかな瞳が、メイが廊下を走る音が、そして

「い……やだ……死にたく……ない……」

今まで無抵抗だったノエルが、初めて男の腕をつかんで震えた。

ようやく意思が宿った彼女の瞳を、男は狂気に支配された目で真正面から受ける。もはやその残酷な笑みを隠すこともやめたようだ。

「ああ、そうだとも。死にたい人間なんかいるものか。だからこそ、殺し甲斐がある」

嫌だ。死にたくない。

「君は今、殺すに値する」

嫌だ。まだ、生きていたい。

「や……だ……」

「いい表情だ。やはり首から上を持ち帰るとしよう」
声が出ない。

誰か助けて。こんなに叫んでいるのに、いつだって、私の声は誰にも届かない。深い闇の中で光を求めて声をあげても、みんなが見えぬ振りで、通り過ぎて行く。

違う。手を差し伸べてくれた人は、いた。

苦しい時に傍に居てくれようとした人は、今までだって、きっといた。けれどいつだって私が、自分でそれを無視していただけだった。

この町に来てからのたったこれだけの時間でだって、多くの人がノエルを気遣ってくれていた。

ただ、私はそれに気付くのが怖かった。近づいた人が離れて行くのが怖かった。

どうして私は、普通に生きられるチャンスを与えてもらいながら、蹴飛ばして棄ててしまったのだらう。

涙が更に溢れ、視界が暗くなってくる。

「君は実に興味深く、素晴らしい贄だった。しかし、名残惜しいがお別れだ」

止めの一押し。男の手に血管が浮かぶ。

少女は、最期に思い出していた。こんなにもどうしようもない自分を、全部ひっくるめて抱きしめてくれたあの優男のことを。

もう一度、会いたいな……。

風が吹く。

唐突に誰かの、いやノエルの悲鳴が聞こえた。

「ノエルッ！」

「ちょ、デインさん、どうしたんですか！」

急に方向を変えて裏路地に飛び込むデインを見て、メイが慌てて叫ぶ。

「ノエルの声が聞こえた！」

「ええ？私は、何も……」

「こつちだ！」

すぐ近くにノエルがいる。自分でも説明できないその予感確信だった。

ガス灯の光もろくに届かず、ほのかな月明かりですら建物の影に遮られてしまう暗闇。そんな狭い路地裏に、人間が二人。

よく見えないが、一人は男だ。壁に沿うように倒れている。

もう一人はその反対側の壁にもたれたまま座り、うつむいている小さな影。

「ノエル！」

今までで一番もどかしい数メートルを駆け抜ける。

だが、たどり着いたそこには、未だ笑顔を見ぬ少女の変わり果てた姿があった。

「こんな、ひどい……」

カンテラで照らすと、ノエルの小さな体には無数の傷がついていた。さらに首に残った手形の痣を見て、デインの息が止まりそうになる。

「そんな、こんな残酷なことって……」

ノエルが一体何をしたというのか、デインには全く見当もつかない。

「ノエル……」

背後で革靴が砂を噛む音がして、男が唸る。振り返ると、亡霊のような男が立ち上がってディンを、いや、ノエルを見ている。

「き、貴様……一体、何をした……！」

ディンは理解した。こいつがノエルをやった。

「お前が、ノエルを……！」

ディンは怒りに任せて懷に手を伸ばしていた。が、その鉄の塊を取り出す前に、相手が動く。狭い路地を信じられないスピードで迫る男の手には、いつの間にか大きなナイフが握られていた。ゆっくりと時間が流れるようだ。

銃声が夜の町に響く。

男はディンの目の前で凶悪な笑みを浮かべている。銃を持った右手はあらぬ方向に弾かれ、当然のごとく弾は外れた。

「な……」

「死ね」

左手でディンの右手を封じたまま、右手のナイフがきらめく。その瞬間、

「はあああああッ！」

空気を振るわせるような気合いと、訳も分からず目の前で交錯する青と黒の影。あつと言う間もなく、黒の影が吹っ飛んで視界から消える。

その代わりに目の前に降り立ったのは、シスター・メイだった。

見たこともないような厳しい顔つきを崩さず、息をつく間もなく吹っ飛んだ黒い影、すなわち男の方へと走る。

頭を振りながらそれでもナイフを手放さずに立ち上がった男は、すでに相手との距離が無くなっていることに気が付いてぽかんと口を開けた。

「あ……？」

高く上がったメイの踵が、地面と水平に繰り出される。その狙いは正確無比に男のこめかみであり、もはやそれは回し蹴りというよ

りは水平踵落としとでも呼んだ方が良さそうだった。

ばきやつという耳慣れない音がして、男の体が地面にツーバウンドする。そして今度こそ動かなくなった。

右足が風を切る音と、地面に戻る音。体の回転を追って、優雅にブロードが舞った。

修道服の裾を直して、メイが振り返る。意味が分からずに思わず言葉をなくしていたディンに、メイは軽くはにかんで肩をすくめてみせた。

「私より、ノエルちゃんを」

はつとしてノエルに向き直るが、彼女の目は伏せられたままだ。「どうして、こんなことに……」

彼女はただ運命に翻弄され続けていただけ。そこにノエルの意思がどれほどあったというのか。

「君が何をしたって言うんだ……」

どうにも抑えが聞かなくなって、ディンはノエルの肩をつかんだまま嗚咽を漏らす。と、メイが後ろからディンに笑いかけた。

「まだ、泣いちゃダメですよ。ほら」

「……ディン」

静かな声が目の前から聞こえて、ディンは弾かれたように顔を上げる。赤い瞳から放たれた弱々しい視線が、ディンを捉えていた。

「まだ、私、生きてるよ……生きてるから」

途切れ途切れに、しかししっかりと言葉を紡ぎ、少女が微笑む。

それは、ディンが初めて見るノエルの笑顔だった。不覚にも涙が次々と溢れて止められない。

「ノエル……良かった……生きててくれて……」

ノエルは不思議そうにディンを見る。

「大人の人でも、泣くんだ」

「バカ、当たり前だろ……ノエルのせいだ」

「悲しいの」

ノエルの髪を撫でるディンの手つきは、まるで本当の娘に触れる

ように優しい。

「ノエル、人は嬉しくても泣けるんだよ。多分僕は今、人生で一番嬉しい瞬間にいるから、泣いちゃったんだよ」

「そっか……」

穏やかな表情でうなずいてから、ノエルは顔を上げた。

「デイン、私、生きたい。生きていたい」

「ああ、そうだね。それでいい」

「ごめんね、デイン……。それにシスターも」

デインとメイはほぼ同時に首を振った。

「ノエルちゃん、謝ることなんか何もないんだよ？またノエルちゃんと私たちは会えた、それでいいじゃない？ね？」

「謝るのは僕らの方だ」

目を丸くするノエル。

「どうして……」

「辛いのは君なのに、僕は話を聞いただけだった。君の痛みを分かち合ってやれなかった」

「そんなことない……私は、ホントは嬉しかった……嬉しかったんだよ」

堰を切ったように涙をこぼすノエル。

「ノエル、改めて言うけど、うちにおいで。僕は絶対に君を投げ出したりしない」

驚いたような表情の後に、また涙をこぼす。ちゃんとこんな表情ができることに、安心する。頭を撫で、抱きしめようとすると、ノエルは左腕を突っ張って目を伏せる。

「ダメだよ……私は、いい子じゃないから……多分、デインは私のこ」と嫌いになるよ」

デインは思わず吹き出すが、ノエルは涙が滲む目をしばたたかせる。

「なにそれ？ノエルはこんなにいい子じゃないか」

背後でメイが笑う。ちよっと涙声だ。

「でも、こうやって迷惑をかけるかもしれない……」

ノエルは視線をそらす、デインはいつもの優しい笑顔を浮かべる。

「この世に迷惑をかけない人なんていないんだよ。そんなの当たり前さ。ノエルはノエルのままでいいんだ」

ノエルは呆けたようにデインを見て、泣き笑いのメイを見る。

「私はノエルちゃんが教会に来てくれたら嬉しかったけど、デインさんにはかなわないですねえ」

唇を噛み締めながら涙をこらえ、それでも弱々しく腕を突っ張るノエル。

「ノエル？」

「血で、汚れるから……」

「バカだな、もう」

デインが思いっきり抱きしめてやると、ノエルは大きな声をあげて泣き出した。今まで溜め込んでいた自分の思いをぶちまけるように。

「こんな小さな体で、一人で頑張ってきたんだもんね。大丈夫、これからは僕も隣で一緒に頑張るからね」

走ってくる複数の足音。さっきの銃声を聞いて駆けつけてきた警察官だ。

23 帰宅

デインは緊張していた。

元来気の強い性格ではない訳で、悪友ロイドはおろか、年下のメイやシャロにだって押し切られることも多い。

そんなデインなので、人より緊張しやすい質だという妙な自信はある。だが今日はそれを差し引いても特別に緊張しているという、これまた妙な自信がある。

今日は、あの時怪我を負ったノエルが教会での再入院を終え、初めてデインの家にやってくるのだ。

熊のように室内をうろつきながら、落ち着かない様子のデイン。見かねてロイドがだるそうな声をあげる。

「少し落ち着け。お前がそんなに緊張してどうするよ。きっとノエル嬢はもっとドキドキしてるだろう？」

「わ、分かっているけどさ。やっぱり落ち着かなくて」

「ったく、自分から引き取るって言った癖に、大丈夫かね……」

煙草を取り出そうとして、辞めた。さっきデインから注意されたばかりだった。ノエルのためらしいが、ロイドとてマーカスから聞いていなくても、小さい子どもがいる部屋で煙を噴かすのは気が引ける。

「さあ、準備はできましたよ。後は主賓の到着を待つだけです」

テーブルに料理を並べ、シャロが微笑む。のんびりとした調子とは裏腹に、テキパキと料理を作る手際はさすがだ。

「ああ、わざわざありがとうね、シャロ。それにアンナさんまで来てもらって、すみません」

キッチンから出てきたおっぱの女性は、にこやかに微笑んで軽く会釈をした。この黒髪の美人こそが、ロイドの婚約者アンナ・ミ

ユラーである。

中性的な顔立ちで、髪を短くして男装すれば美少年と言っても通用しそうなスラリとした体型。

あまり口数は多くないが、気だてが良く、場の空気を読む力が強い。と思いきや、時折きれいな笑顔のままデドぎつい一言を口にしたりする。普段が可憐な人であるだけに、その精神的ダメージは計り知れない。

いい意味で一筋縄ではいかないアンナの魅力が、癖のあるロイドの性格とうまくマッチしているんだろうなとデインは勝手に思っている。

デインとしては普通の日常の一部としてノエルを迎えてやろうと考えていたのだが、とりあえずメイがそれに反対し、シャロまで話が広がり、結局パーティーを開くこととなってしまった。

今考えればこんな緊張状態では、普段通りも何もない。これで良かったようだ。

「そんで？」

ロイドが意地の悪い笑みを向ける。いい予感はないが、デインには何も心当たりがない。

「え？何が？」

「ノエル嬢だよ。娘にすんの？それとも嫁？」

落ち着こうと口に含んだコーヒーを吹き出すデイン。

「ッ！誰がノエルと結婚すんだよ！」

大声で怒鳴り返すが、ロイドは澄まし顔だ。

「なんだよ、緊張をほぐすためにジョークをとばしてやったんじゃないか。まあ、半分本気だけど」

「僕をどういう目で見てんだ、ったく……。僕はあの子に人並みに幸せになつて欲しいだけだよ」

咳払い。

「でもまだノエルは、人並以下の幸せしか知らない。だからめいっぱい幸せになつてもらわないと、釣り合わない」

「おいおい、完全に親ばかだな……。ディンにこんな一面があったとは、驚きだ」

ロイドは目を丸くしているが、シャロは手を合わせて目を輝かせる。

「ステキなお父さんですね。こんなお父さんのところに来れるだけで、ノエルちゃんも幸せ者だと思いますよ。ね、アンナさん」

アンナは頷いて微笑む。

「ロイドには生まれ変わっても無理ね」

「死んでも、どこか生まれ変わっても、ね。相変わらず人の心をえぐるようなことを……」

ロイドの泣き言を遮るように、ノックの音。ディンの背筋が伸びる。おそらく、メイがノエルを連れてきたのだ。

「ディーンさん！あーそびーましょー！」

楽しそうな声がドアの向こうから響いてきた。ディン以外の一同が苦笑する。

「おいおい、相変わらずだなあのシスターも。俺も見習いたいもんだぜ、あの若さは。……ディン、いつまで緊張してんだ。ちゃんと迎えてやんな」

「わ、分かってるよ」

ディンがドアを開けようとしたところで、

「ディンさん、いるのは分かってますよー。今日こそは耳そろえて返してもらいますからねえ。もう待てませんよー。肝臓売ってでも……」

「やめろおおおっ！どんなシスターだッ！」

未だかつて無い勢いでドアを開けると、メイがにっこりと微笑む。「なんだあ、いるんじゃないですか。それなら早く開けて下さいよ」

虚脱という言葉をこれ以上無いくらい体現させたメイに、ロイドは心の中で拍手を送った。

「メイ、あのねえ……。いいや、上がって。シャロとアンナさんがおいしいもの作ってくれたから」

「あれ？ディンさん、なんだか老け込みましたか？」

「多分君のせいだけだね。さ、どうぞ」

「ダメですよ、画家さんとは言え不健康な生活してたら。人生は体が資本、一に健康、二に健康……そ、そんなに睨まなくても分かってますよ、ディンさんを和ませるための軽いジョークですってば。はいはい、失礼しまーす。わお！すっごいごちそう！」

マイペースなメイが入って行くと、後ろに隠れるようにしていたノエルがひょっこりと現れた。

包帯や絆創膏はもう取れているが、少し不安そうな顔だ。やはり戸惑いがあるのだろう。

「怪我はもう大丈夫？」

「うん……」

シンプルなワンピースがよく似合っていた。

「似合ってるね。自分で選んだの？」

「一応……。大切な日、だから」

視線を落しながらおずおずとだが、嬉しいことを言ってくれる。ディンの緊張がノエルのおかげでほぐれて行く。

「そうだ、後で服とか買いに行かなきゃね。今のとこ僕のしかないからね。でも、何はともあれ、入って入って。みんなも祝ってくれて、ノエルのために集まってくれたからさ。ちょっと狭いけど」苦笑しながら促すのだが、ノエルはなんだかもじもじとしている。相変わらずのクールな表情ではあるのだが、やはりいつもの調子ではない。

「どしたの？」

「あ、あの、えと……入って、いいの？」

「もちろん。だって、今日からここはノエルの家でもあるんだから。遠慮は要らないよ」

「う、うん……」

上目遣いでディンを見てから、両手を組んだり離したり、まるで小動物のように落ち着かない。そんな姿を見て苦笑するディン。

やっぱりノエルの方がずっと緊張していて、不安なのだ。ぽんと頭に手を乗つけてやる。

「ノエル？」

「うん……」

触れて分かったが、小刻みに震えている。それほどまでに彼女にとって、つまり人を信じるということは怖いことに他ならない。

「これじゃ僕がノエルを獲って食うみたいじゃないか」

和ませるつもりで笑うデインだったが、ぱっと顔を上げたノエルは予想外に深刻な顔をしていた。

「わ、私はデインにすごく感謝してる。だから、そんなこと、少しも思っていない……」

元々静かな声が、最後はかすれるように消える。そんな泣き出しそうな表情をしたら、デインも謝るしかなかった。

「ご、ごめん。僕もそんなつもりじゃなかったんだ。あ、そうだ、忘れてた」

デインが思い出したように、改めてノエルに向き合った。

ノエルが怪訝な表情で見上げる中、

「おかえり、ノエル」

「あ……た、ただいま……」

照れ隠しにうつむきながらつぶやくノエルの頭を、デインが優しく撫でる。

「心配しなくていいよ。ゆっくり、のんびりやっていこう」

ノエルが顔を上げ、そしてやっと笑顔を見せた。

23 帰宅（後書き）

とりあえず出会い編は終わりですw

駄文にお付き合いいただいた奇特な方、本当にありがとうございました。
した。

またの投稿の際はよろしく願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9376p/>

天使と絵描きの物語

2011年4月5日19時10分発行